### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

### 宮沢賢治「注文の多い料理店」論 : 面白さに注目した作品解釈

**河内,重雄** 北九州市立大学文学部: 准教授

https://doi.org/10.15017/1932373

出版情報:語文研究. 123, pp. 15-28, 2017-06-04. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

# 宮沢賢治「注文の多い料理店」:

# ――面白さに注目した作品解釈 -

## 河 内 重 雄

### 一 本稿の狙い

初出は大正十三年十二月発行の童話集『注文の多い料理店』て来た二人の紳士たちを主人公とする、三人称の物語である。宮沢賢治「注文の多い料理店」は、狩りのため山奥にやっ

(発行者は近森善一)。

は「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありまろを見ると、山猫軒と書かれたレストランがある。開き戸にてきた二匹の犬も死んでしまう。途方に暮れる二人がふと後が、あまりに山が物凄いため案内の猟師はいなくなり、連れが、あまりに山が物凄いため案内の猟師はいなくなり、連れ作品梗概は以下の通りである。

に立っている。いなくなった猟師もやって来て、安心した二

でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中突き破って入ってきて、山猫軒の親方のいる部屋に飛び込んを、最後には自分たちが食べられようとしていることを悟いく。最後には自分たちが食べられようとしていることがでらに従い、持ってきた鉄砲や身に着けているものをはずしていく。最後には自分たちが食べられようとしていることを悟り、二人は逃げようとするが、扉は開かず、逃げることを悟り、二人は逃げようとするが、扉は開かず、逃げることを悟り、二人は逃げようとするが、扉が高がでいると、扉の裏には「こせん」と書いてあり、二人が直がで入ると、扉の裏には「こせん」と書いてあり、二人が喜れていると、原の裏には「こせん」と書いてあり、二人が直が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。山猫軒は煙のように消え、気が付くと二人は草の中でいく。

なった二人の顔だけはどうやっても元通りにならなかった。 人は山鳥を買って東京に帰るが、先ほど恐怖で紙屑のように

注文の多い料理店」(以下、本作とする)の先行研究について

は、青山英正氏が次のようにまとめている。なお、引用文中

引用の前に掲げておく。 にある、宮沢賢治が書いたと思しき「広告文」を、青山論の

会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感で て注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都 文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つ 二人の青年神(「紳」の誤植)士が猟に出て路を迷ひ「注 (以上、「広告文」)

が謳われていることとの「矛盾」を、「山猫」を「単なる ことと、広告文に「糧に乏しい村のこどもら」の「反感. 先述の工藤哲夫は、「山猫」が貪欲で狡知にたけている

徴としない代わりにその貪欲さや狡知にたけている性質 にすぎないというのである。これは、「山猫」を自然の象 友情出演し、懲らしめという形で『反感』を表明した」 懲戒者」と見なすことで解決しようとした。「山猫」は 「山にいるのを幸い、『村の子どもら』から依託を受けて

> 項対立的図式を維持しようとした論だと言える。 村の子どもら)と狡知にたけた都会(=紳士)という二 のたんなる代弁者と位置づけることで、素朴な農村(= かつての「注文の多い料理店」研究は、自然 (農村)

にも目をつぶり、その役割を「村の子どもら」の「反感」

んとするところを汲み取りつつ、「紳士」たちに対する批 れないことが明らかになると、広告ちらしの文言の言わ としていた。やがて、「山猫」にそのような役割を当てら し、「山猫」を前項と結びつけて後項に対する批判の視座 対人間(西洋文明、都会)という二項対立的図式を設定

上、結局のところ工藤の言う「矛盾」は解決されていな めたのであるが、語り手や読者ないし「理想の村」を、 「糧に乏しい村の子どもら」と無条件に同一視できない以

いに等しいと思わざるをえない。

須貝や府川は、「作品の中の特定の人物」以外にそれを求 判の視座をどこに求めるかに読解の焦点が移っていった。

作に確認すべく、山猫や猟師、犬などが批判の主体とされて 広告文の「都会文明と放恣な階級とに対する(略) 反感」を本 み取るというのが、 紳士たちに象徴される西洋文明や都会への批判を本作に読 先行研究の大きな特徴の一つと言える。

他に先行論の特徴として、本作の面白さの源に関する考察

れまでの大まかな傾向ではあるまいか。 れまでの大まかな傾向ではあるまいか。 れまでの大まかな傾向ではあるまいか。 でい料理店」論――〈注文〉の二義性を中心に」はその典型でい料理店」論――〈注文〉の二義性を中心に」はその典型では、一つの論文に紳士批判とエンターテムメント性の指摘が比重の差はあれ見られるというのが、これまでの大まかな傾向ではあるまいか。

「イギリスの兵隊」の格好について、本稿の狙いは渡部氏の論文に近く、本作の面白さにこだわることがのた立脈が見えてくると考える。「大記の一次には神士批判にあることが多く、面白さに関するとなかった文脈が見えてくると考える。「大記の一次には神士批判にあることが多く、面白さにはでたが、となかった文脈が見えてくると考える。「大記の神士の一次にはいるとはあれと先に述べたが、本稿の狙いは渡部氏の論文に近く、本作の面白さにこだわった。

山元隆春氏は次のように述べている。例えば、二人の紳士の「イギリスの兵隊」の格好について、

ティングドレスを着用している〉と解し、その理由とし〈イギリスの兵隊の形〉を、〈狩猟用の正式の服装、ハン(略)秋枝美保は、このテクストを評釈する中で、この

金 らも推測しうるように、かなり居丈高で、いかにも〈成 0) を、批判する意図〉を読み取る。つまり、〈制服〉 そこに賢治の、〈西洋貴族の服装をまねた紳士たちの態度 にこの冒頭の一文の〈二人の若い紳士〉に対する形容に、 服装とよく似ている〉ことを挙げている。 ストにおける て、〈十九世紀イギリスの歩兵の制服が 〈没個性〉(秋枝)性に対する批判である。たしかに、こ 〈兵隊〉の格好が用いられていることを、賢治の他のテク 〈二人の若い紳士〉には、この一文に続く会話内容か (秋枝)を思わせるような、卑しい雰囲気がある。 〈兵隊〉のイメージとかかわらせながら、 (中略) 狩猟家の 秋枝は、さら の持つ

の紳士たちの設定も、作品の面白さという観点で読むと、別ちの一つを掘り起こす作業として、妥当と言える。だが、こ士批判の文脈でのものである。作品に流れる無数の文脈のう士批判の文脈でのものである。作品に流れる無数の文脈のうい、二人の没個性性や成金趣味、ステイタス意識が読み取れり、二人の没個性性や成金趣味、ステイタス意識が読み取れり、二人の決したが、

服装を真似たものではないか」と指摘している。北村恒信『陸関口安義氏は二人の服装について、「イギリスの海軍士官の

の解釈が可能であろう。

海軍服装総集図典――軍人・軍属制服、天皇御服の変遷』

K

は次のような一節がある。

えれば、同じようにことわざで言うと、陸に上がった河童とは団栗の背比べと考えられる。本作の二人の服装を海軍と捉たとの指摘がある。童話「どんぐりと山猫」のテーマの一つが人」であったのに対し、「海軍の最小戦闘単位は艦」であっが人」であったのに対し、「海軍の最小戦闘単位は艦」であっが別」であったのに対し、「海軍の最小戦闘単位は艦」であった。

について考えてみたい。文明批判といった解釈と比べ、ある本稿では、本作の面白さにこだわることで可能となる解釈

している。

11

った滑稽味を帯びてこないだろうか。

本作の性格として面白みを指摘し得る以上、本作をこのようわれるかもしれない。が、作品の性格は作品ごとに異なり、いは面白さに関する研究というのは高尚さもなく、地味に思

### リアルタイムの観察と注文

な観点で解釈するのは必要かつ妥当なことと考える。

的な書き言葉による注文であるため、二人は自分たちの解 てくるのであれば、二人の紳士は「なぜそんなことをするの 文ではなく、例えば案内人が話しかける形であれこれ注文し 的な伝達しかありえない。」と述べている。書き言葉による注 猫の親方と紳士たちの間に至っては、書きことばによる一方 れ注文する場面にあろう。親方の注文について、山元氏は における面白さの中心は、 笑ってしまうような書き方がなされている。 か」と、注文の意図を案内人に直接問うことができる。 本作の冒頭、 二人の紳士の服装からして、 山猫と思しき親方が二人にあれこ が、 読者がくすりと やはり本作 一方 山

による注文とも異なる。渡部氏は前掲論文で次のように指摘一方的な書き言葉による注文は、一方的に話しかける言葉

以外に頼るべきものがない。

に〈注文〉の二義性による言葉遊び的要素を含んだエン童話「注文の多い料理店」にはこれまで見てきたよう

文〉形式が示すように、文字を媒体としてしか伝わらなターテイメント性が見られた。この〈注文〉は作中の〈注

いものであると言っていい。なぜなら発話を媒体として

いりください。」で見られたような「お中」と「お腹」のです。大へん結構にできました。さあさあおなかにおはの表情などによって、また、⑬「いや、わざわざご苦労く注文〉が提示されていた場合、細かなニュアンスや互い

違いはアクセントの違いによって解決されるものであろ

うためだ。

る。しかしながら、アクセントに関する指摘などは、案内人渡部氏の論では、案内人がいるような状況が想定されてい

いくつか引用しよう。

調子も注文を解釈する上での情報となり得る。無論、声の調も、あざ笑っているような感じや悲しそうな感じなど、声のまた、話しかける言葉の場合、たとえ相手の姿が見えなくと不在の一方的な話しかける言葉による注文にも当てはまる。

人は声の調子などから相手の真意をはかるようなことはできの知恵があるかどうか疑問である。書き言葉であるため、二

子で騙すことも可能だが、本作の親方については、そこまで

ない。

**電報とは存じるけら住てはどうような気で見なられ。電報は手紙と比べて返事をする必要性も低かったのではあるまいか。電報が比較的近いと思われる。短い片仮名の文章を受け取り、** 

一方的な書き言葉による伝達というと、大正時代であれば

までに時間がかかることも珍しくない。本作の注文は、相手相手の置かれている状況も分からずに送り、相手が受け取る電報と本作における注文はどのような点で異なるか。電報は

な本作における注文の特徴がよく表れている箇所を、以下にえることができる点が、電報とは異なると言える。このよう点で言うと、リアルタイムで相手を見つつ伝えたいことを伝相手もリアルタイムで受け取っている。山猫らしき親方の視を見ながらリアルタイムで相手に伝えたいことを書き示し、

柄のついたブラシが置いてあつたのです。した。そしてそのわきに鏡がか、つて、その下には長いところがどうもうるさいことは、また扉が一つありま

扉には赤い字で、

はきものの泥を落してください。」「お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それから

と書いてありました。(略

そこで二人は、きれいに髪をけづつて、靴の泥を落し

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、ました。

の中に入つてきました。そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室

ら靴下をぬいで足に塗りました。(略)

二人は壺のクリームを、

顔に塗つて手に塗つてそれか

る電報などとは異なる伝達であると言える。

これい。「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましそれから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

てありました。と書いてあつて、ちひさなクリームの壺がこゝにも置い

ひゞを切らすとこだつた。こゝの主人はじつに用意周到「さうさう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳に

だね。 し

アルタイムで二人を見ながら注文・受け取りがなされていると、再びクリームの入った壺が置かれていたというのも、リ監視していることを意味している。クリームについての注文でラシを置くや否や消えたというのは、親方が二人を常に

しまったのであろう。伝えるべきことをまとめた上で書き送するため、扉のメッセージ・注文が合計十三もの数になって一文「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」一文「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」

察しつつ書き言葉を一方的に送り付けるという状況の設定自察しつつ書き言葉を一方的に送り付けるという状況をつくるこいうのは、現在の技術であれば、そのような状況をつくることは可能であろう。監視カメラで部屋や廊下の様子を見ながにあっても不思議ではない。しかしながら、本作が発表された大正当時は、このような状況は実現不可能だったのではあた大正当時は、このような状況は実現不可能だったのではあた大正当時は、このような状況は実現不可能だったのではあるまいか。二人の大人が騙される、リアルタイムで相手を観るまいか。二人の大人が騙される、リアルタイムで相手を見ながら一方的に書き言葉を送るとリアルタイムで相手を見ながら一方的に書き言葉を送るとリアルタイムで相手を見ながら一方的に書き言葉を送ると

### 三 騙し騙される関係について

体、ユニークな発想であると言えよう。

前章では山猫らしい親方が二人を騙すことに関して述べた

紳士たちを騙している箇所をいくつか確認してみよう。 が、本作は騙し騙される関係が錯綜している。まず、親方が

1 れから泡を吐いて死んでしまひました。(略 が、二疋いつしよにめまひを起して、しばらく吠つて、そ それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のやうな犬

そのときうしろからいきなり、 二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

「わん、わん、ぐわあ。」といふ声がして、 あの白熊のやう

な犬が二疋、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできまし

2 な字でかう書いてありました そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろ

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承

た。

知ください」

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

扉の内側に、また変なことが書いてありました。 鉄砲と弾丸をこ、へ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

3

4 すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が

つありました。扉には斯う書いてありました。 「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてく

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでし ださい。

た。

(5) するとすぐその前に次の戸がありました。

十五分とお待たせはいたしません。 「料理はもうすぐできます。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてく ださい。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありまし

ところがその香水は、どうも酢のやうな匂がするので 二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだらう。」

引用①の死んだはずの犬が生きていたことについては、親

うに述べている。 解せられよう。この犬の死については、五十嵐淳氏が次のよのまり、二人の紳士は犬が死んでしまったと騙されたのだとにはいったため、魔力が解けてしまったことが原因であろう。方が「ナフキンをかけて、ナイフをもつて」と、食事の体勢

もいえるし、導入部から二人の幻想は始まっているとも切っている。これは、語り手が読者をまどわしていると後に再び登場するのに、「死んでしまいました」と言い

いえるのではない

かどうかはともかく、素朴に語り手の言うことを信じる訳にない。このことは引用⑤にも当てはまる。語り手は、山猫者を騙しているため、騙し騙される関係が二重に見出されるというれているため、騙し騙される関係が二重に見出されるということだ。このことは引用⑥にも当てはまる。語り手は、香水」と言っているが、実際には酢であるからだ。読者が騙されるというのは、ゴッカンには、山猫者を騙しているが、実際には酢であるからだ。読者が騙されるというがはともかく、素朴に語り手の言うことを信じる訳にない。この点については、山猫者を騙しているが、実際には酢であるからだ。読者が騙されるというがは、語り手を騙しているというが表します。

本作では、引き戸ではなく「開き戸」の表と裏に、ひとつながりの文章が書かれている。それを二人の紳士が読んでいるがりの文章が書かれている。これは、二人の紳士が本のページをめくって読み進めていくイメージに近く、本作を二人の読をが読み進める姿に重なると考えられるのではあるまいか。として書いているため、扉数は七、頁数十三と、本と言うにとして書いているため、扉数は七、頁数十三と、本と言うにとる分量になっている。本作の初稿の執筆時期は、童話集初版本の目次の記録によると大正十年十一月十日。この時点では宮沢賢治の妹トシはまだ亡くなっていない。前掲の渡部論版本の目次の記録によると大正十年十一月十日。この時点では宮沢賢治の妹トシはまだ亡くなっていない。前掲の渡部論は宮沢賢治の妹トシはまだ亡くなっていない。前掲の渡部論版本の目次の文章が書かれている。

の星」を書いていることはあまり注目されていない。に読み聞かせるために童話「蜘蛛となめくぢと狸」「双子正七年(一九一八年)八月、二十二歳の宮沢賢治が弟妹正七年(一九一八年)八月、二十二歳の宮沢賢治が弟妹上 (一九二一年)、二十五歳の宮沢賢治が高知尾

読者二人というのも、兄が妹や弟に、あるいは親が子に読み先に、紳士二人の姿が読者二人の姿に重なると述べたが、

はいかないのは確かであろう。

文には次のような指摘が見られる。

等ではない。

その犬の眼ぶたを、ちよつとかへしてみて言ひました。 「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、 「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやし

さうに、あたまをまげて言ひました。

二人は云ひながら、その扉をあけました。するとその

裏側に

「注文はずゐぶん多いでせうがどうか一々こらへて下

「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士は顔をし

けれどもごめん下さいと斯ういふことだ。」 「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取る かめました

**「クリームをぬれといふのはどういふんだ。」** 

まり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。(略)」 「これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあん

> も、本作の読者二人の読書行為に重なるのではあるまいか。 る・教わる関係である。片方がもう片方に説明するという形 人が疑問を呈し、もう一人が説明をするといった、教え

凄いからだってさ」などと尋ね、答えながら読んでいくので

例えば、「どうして犬は死んじゃったの?」「あんまり山が物

「犬は死んでなかったんだね」「僕たちもこの二人みたいに騙 はないだろうか。本作の最後、犬が突然入ってくる場面も、

応し得るか、それに対し年上の読者がどう反応するであろう て書かれた物語だと考える場合、年下の読者がどのように反 本作は年上の読者が年下の読者に読み聞かせることを想定し されてたね」などと話しながら読むことになると考えられる。

か、といったことが問題となろう。

騙し騙される関係について付け加えて言えば、紳士二人の

のような会話に読者は騙されてしまわないだろうか。 会話によって読者が騙されてしまう側面もあろう。例えば次

ペンキ塗りの扉がありました。 ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろの

だらう。」 「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるの

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなかうさ。」

扉の裏側には、

ください」
を物類、ことに尖つたものは、みんなこゝに置いて「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他

「は、あ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気の庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。(略)と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金

らんごうう。」ものはあぶないと斯う云ものはあぶないと斯う云ものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯う云

で見えるのはそのためだ。 はごまかされてしまう。本作は騙す・騙される関係が錯綜したように感じ、紳士たちによって知らず知らずのうちに読者 思われる。親方が紳士を騙し、語り手によって読者も騙され ま立の内容等に疑いをもつことなく読み進めることになると で見えるのはそのためだ。

は次のような一節がある。 本作が収録された童話集『注文の多い料理店』の「序」に

の幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほつたほんたけれども、わたくしは、これらのちひさなものがたり

うのたべものになることを、どんなにねがふかわかりま

せん

「あんまり山が物凄いので」犬が死んでしまった、などという語りを素朴に信じてしまった本作の読者二人は、紳士たちを笑うことはできない。騙し騙される関係が錯綜しているが故の面白さ、その中で見つけることのできる「ほんたうのたべもの」とは、私たちは人の失態を笑うことなどできないとが、自分がまんまと騙されてしまったことを知る者は自分一ば、自分がまんまと騙されてしまったことを知る者は自分一がある。しかし二人で読む場合はお互いに騙されたことを知っている。騙されたというのをなかったことにすることはできない。だがそれ故にこそ「ほんたうのたべもの」になる、できない。だがそれ故にこそ「ほんたうのたべもの」になる、と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読と考えることもできるのではないだろうか。本作を二人で読めまり、

### 四 童話集の他作品について

紳士が親方に騙されたように、読者も語り手に騙されていた前章では網の目のような騙し騙される関係性について述べた。本稿二章でユニークかつ騙されやすい状況の設定について、

などは、読者は騙されたように感じると思われる。例えば安 と考えられるが、童話集の他作品だと「狼森と笊森、 盗森」

藤恭子氏は次のように指摘している。

など、「林の底」の〈聴き手〉= からしてぬすと臭い」と既に森に名前がついているとこ 来を話すと言いながら、話の途中でその目的がずれ、「名 話そのものに矛盾はがないわけではない。 すままに全面的に話を展開させきっているところである。 を「まったくその通りだつたろう」と信頼し、「巌」の話 いは、「狼森と笊森、盗森」の〈聴き手〉が話し手の しかし、「林の底」と「狼森と笊森、盗森」の大きな違 〈語り手〉であるならば 森の名前の由 嚴

という設定である。以下は「狼森と笊森、盗森」の一節 黒坂森の「巨きな巌」が「わたくし」にある日話してくれた 黒坂森、盗森)に「どうしてこんな奇体な名前がついたのか」、 狼森と笊森、 盗森」は、小岩井農場の北の森(狼森、 **笊森、** 

当然矛盾を指摘するところである。

う少し北へ行きました。 さてみんなは黒坂森の云ふことが尤もだと思つて、も

それこそは、松のまつ黒な盗森でした。ですからみん

なも

「名からしてぬすと臭い。」と云ひながら、森へ入つて行

つて、「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

歌の歌詞「狼森のまんなかで」が名の由来のようだが、これ とは狼森や笊森も同様であろう。狼森については、狼たちの ては「名からしてぬすと臭い」と、すでに名が付いており、 一見したところ名前の付いた理由が語られていない。このこ 名前が付いた理由について話すと言いながら、盗森につい

と指摘するごとく、「狼森と笊森、盗森」の語りも信用してよ すでに名があるような語りになっている。安藤氏が「矛盾

と思われる。笊森についても「笊森の笊はもつともだ」と、 も狼たちが歌う以前に狼森という名がすでについていたもの

もつ。例えば、市販のボールペンに「太郎」という名前を付 唯一無二のものと見なされる。「狼森と笊森、盗森」の四つの けた場合、その太郎という名のボールペンはかけがえのない、 いものかどうか、読者は戸惑うのではあるまいか。 名前=固有名詞は対象を唯一無二の存在足らしめる機能を

意識をもっており、名前がなくとも固有名詞的な存在=唯 森は、名前が付く以前からそれぞれ「おれはおれだ」という

無二の存在として現れてきている。名はもっていないが、名

かし、それぞれが自我をもっているため、人間は森を四つの間の都合によって幾通りかの付け方が可能なはずである。し四つの森がそれぞれそのような自己意識をもっていないとす前をもっているも同然の存在、と言い換えてもよい。仮に、

と笊森、盗森」には次のような一節が見られる。 それぞれの森にそれぞれの名が付いた理由に関して、「狼森 全く異なる森として見なす以外にない。

に来て云ひました。 黒坂森、すなはちこのはなしを私に聞かせた森の、入口不ってみんなは、もっともだと思つて、こんどは北の

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたへました。「粟を返して呉ろ。粟を返して呉ろ。」

**笊があるからだ。黒坂森の巌は全ての森の名の由来を語るとれていると言える。狼森には狼が九匹おり、笊森には大きな黒坂森以外、「どうしてこんな奇体な名前がついたのか」語ら姿形であると解釈できよう。その意味では、「形を出さない」とあることから、名の由来はそれぞれの「形を出さないで」とあることから、名の由来はそれぞれの** 

は言えない。
「形」が語られていないからといって、信用できない語りだとは一言も言っていない。黒坂森の名の付いた理由=黒坂森の

(名前の決定を先に語る)であるため、信用できない語りに見えてあと粟を盗んだことが分かるという事前的・先取り的な語り的に名が付くという語り(「形」が名前に先行)ではなく、この順番=時間認識にある。盗人であることが分かった後で事後順番=時間認識にある。盗人であることが分かった後で事後

ぬすと臭い。」という「百姓」たちの発言から、百姓たちや黒名を付けることができる)状態にある。先の引用の「名からしてけ=「形」の発生があれば、自ずと名が生じる(自分で自分にれ固有名詞的な意識をもっている。そのため、あとはきっか

は飛躍したものに思えてしまうものである。森たちはそれぞ

しまうのだ。事後的な発想に慣れた読者には、

事前的な発想

名の発生との関係・順番に私たちは違和を感じてしまうのでちからすると事前的な発想・語りであるため、「形」の成立とかである。語り手や巌、百姓や森たちの時間感覚と異なり、私たちから、巌や語り手に時間についての意識があることは確語りから、巌や語り手に時間についての意識があることは確

考えにくい。「いつごろ」や「いちばんはじめから」といった坂森の巌、語り手の「わたくし」などが名付け親であるとは

名付ける・名付けられるという関係は、上下関係、支配・被 に名が生じたというのは、森の自律性と関わると思われる。 百姓たちや黒坂森の巌が名付けたのではなく、 自然発生的

笊森、 りに思えてしまう。童話集に収録されている本作や「狼森と ちの時間感覚が私たちの感覚と異なるため、信用できない語 関わっている。「狼森と笊森、盗森」では森や百姓、語り手た 本作の場合は騙し騙される関係の複雑さ、面白さに積極的に 、盗森」以外の作品の語り手にも、 信用してよいものか

る理由は、本作と「狼森と笊森、盗森」とでは異なっている。 支配の関係であるからだ。語り手が信用できないように見え

どうか迷うと思われるものがある。

びひどくぶつつかり合ひます。 す。兄貴の烏も弟をかば な急いで黒い股引をはいて一生けん命宙をかけめぐりま 行かうとします。烏の義勇艦隊はもう総掛りです。みん さんぶら下つて、鳥を握んで空の天井の向ふ側へ持つて つ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたく たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅がはひつて、ま ふ暇がなく、 恋人同志もたびた

ちがひました。

さうぢやありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、

東の 山

から泣いて登つてきたのです。 (「鳥の北斗七星

そこのお旅屋で、あのまばゆい白い火を、あたらしくお ら、お日さまはなんだか空の遠くの方へお移りになつて、 けれども、その立派な雪が落ち切つてしまつたころか

うしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら 「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすは 焚きなされてゐるやうでした。(略)

して毛皮の人は一生けん命走つてきました。 叫びました。子どもはちらつとうごいたやうでした。そ

(「水仙月の四日」)

上を指摘し、筆を置くこととする。 の読者という観点で考察することは可能であろう。最後に以 むものであるとすれば、童話集収録の他作品についても二人 童話集のタイトルは本作からとられており、本作が二人で読 作品ごとに展開に即して検討する必要があると言える。また、 なぜ語り手が信用できないように見える必要があるのか。

— 27 —

### 注

傍線は全て筆者によるもので、ルビは適宜省略した。和六十一年一月 筑摩書房)による。本稿における引用文中の注1 以下、宮沢賢治の童話作品の引用は全て『宮沢賢治全集8』(昭

注2 「宮沢賢治「注文の多い料理店」論――猟師・犬・団子への着

注 11

摘だけにとどめる。

十一月 筑摩書房)による。 十一月 筑摩書房)による。 第十二巻 本文篇』(平成七年

におけるテクスト・ストラテジーの検討」(『語文と教育』昭和注5 「読むという行為成立のダイナミズム ――「注文の多い料理店」注4 『東アジア日本語教育・日本文化研究』(平成二十三年三月)。

い料理店」より。 注6 『賢治童話を読む』(平成二十年十二月 港の人)の「注文の多

六十三年八月)。

47 平成八年九月、国書刊行会。

注9 「読み研注7 平成八年

注 10

IX』平成十九年八月)。
「読み研」方式で読みとく「注文の多い料理店」」(『研究紀要

るべきではあるまいか。イメージが形成されれば、村人たちはをコントロールする、広告の戦略性と絡めての解釈である。広告の戦略性について考えるのであれば、私たちはむしろ、本稿告の戦略性について考えるのであれば、私たちはむしろ、本稿告の戦略性について考えるのであれば、私たちはむしろ、本稿と内容を素朴に信じ、本作に見出そうとするのではなく、広告た内容を素朴に信じ、本作に見出そうとするのではなく、広告の戦略性については、大正当時の様々な商品に神士二人が読む扉の文章については、大正当時の様々な商品に

ることができようか。いずれにせよ、本稿ではその狙いから指のイメージという点では、柳田国男の民俗学なども視野に入れいて、本作の個性を探ることになろう。侵入者に牙をむく田舎近代以降の田舎のポジティヴな描写・イメージ形成の流れにお実際に怒ることができる。美しい風景で見る人の心を和ませる、実際に怒ることができる。美しい風景で見る人の心を和ませる、

へ」(『国文学 解釈と鑑賞』平成六年四月)。 「宮沢賢治『林の底』 ―― 童話集『注文の多い料理店』の戦略

(こうち しげお・北九州市立大学文学部准教授